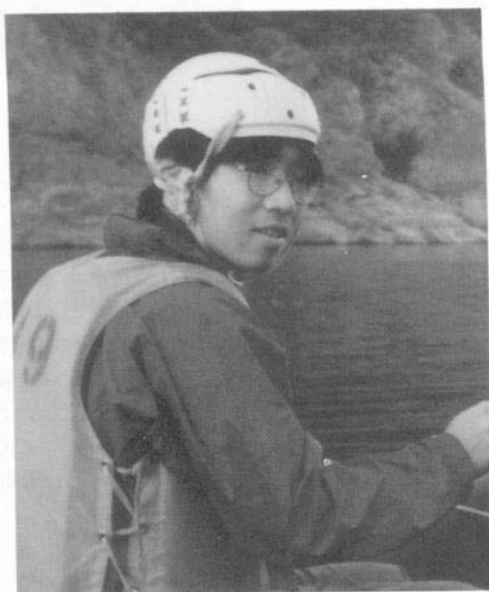


第三部

村上哲也君追悼文集



〈球磨川〉 '87.2.4~9



↑高曽の瀬にて

↓岩との衝突を回避する4人



〈雑感〉

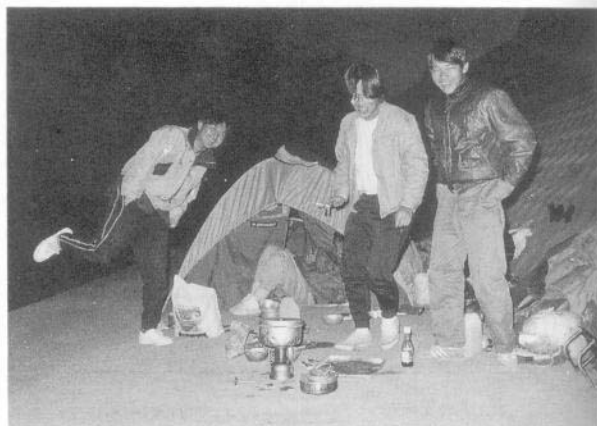
航行中、見知らぬオッサンが1人橋の上に立っていた。近づくと、いろいろと話しかけてくる。関大探検部の者で、白石まで行くつもりだと言うと、「気をつけて」と言ってオッサンは去って行った。航行後、BCへ人吉駅前の通りを歩いていると、待っていたかのようにあのオッサンが居るではないか。山下さんと話しをしたが、後で聞くと、夜テントに来るかもしれないと言う。サギ師か泥棒じゃないでしょうねえとボク。夕メシを食っていると本当にそのオッサンはやってきた。オッサンの名は富永氏。専修大の探検部の主将で、石狩川をボートで、全流航行したこともあるとか。その夜は、富永氏がわざわざさし入れて下さった球磨焼酎「白岳」を酌み交わしながら歓談。話し合える同志がないものだから、フラストレーションがたまっているとかで、よく飲み、よくしゃべった。気がつくと終電がもう出ている。歩いて帰るという富永氏はテントを出る時、けつまづいてころびそうになっていた。

村上哲也君遺稿



↑荒波へと立ち向かう村上

↓人吉B.C.にて





↑郡上八幡上流地点



↑ボートに溜った水を出す作業

〈雑感〉

2度の転覆。転覆しかけそうになったのは数知れず。合宿前の子想をはるかに上回る急な流れと水量であった。岩根氏曰く、“全く別の川。以前は大きな岩として横を通っていたのが、今回余りにも水量が多くて岩の上から落ち込みに入っている” たまったもんじゃなかった。1度目は、「あんな所で転覆するとはなあ」と笑う余裕もあったが、2度目ともなると、全員絶句して岸にたたずみ、ボーゼンと転覆した地点を眺めていたのがであった。

村上哲也君遺稿

〈春期外苑合宿〉 '86.5.20~25

↓ラダー（ワイヤー梯子）を登る村上



↓ボッカの苦しみと闘う……





↑西穂高岳にて



↑先輩と共に岳沢に行く

＜雑感＞

今回の合宿は、ピクニック程度の登山しか経験のなかった僕にとっては、はじめての本格的登山であり、出発前は多少の不安はありましたが、目的の山頂を踏むことができ、また、少しではあるけれども、ある程度のキャンピング技術を習得できたことなど、有意義かつ充実したものであったと思います。しかし、担当の医療や気象については、先輩の方々に頼りっきりで、隊員の半数以上が風邪をひいたにもかかわらず、何の処置も講ずることでもできなかったことや、天気図の作成のしかたをあまり理解していなかったことなどは、今後に向けての反省材料にしたいと思っております。最後になりましたが、お世話になった先輩・OBの方々に深く感謝いたします。

村上哲也君遺稿



↑奥明神沢にて

村上哲也君の主な活動記録

- 1986年 4月3日 関西大学 経済学部 入学
- 10日 探検部 入部
- 5月2日 穂高岳合宿 岳沢定着
- ～5日 (於；北アルプス 穂高連峰)
- 20日 春期 外苑合宿
- ～25日 (於；関西大学裏山)
- 7月21日 大台ヶ原 東ノ川 遡溪 夏期合宿
- ～23日 (於；奈良県大台ヶ原)
- 10月25日 クロスカントリー合宿
- ～26日 (於；京都府北山)
- 11月15日 六甲山系縦走
- ～16日 (於；兵庫県六甲山 地藏谷～宝塚)
- 11月25日 ポート秋合宿
- ～28日 (於；岐阜県 木曽川 日本ライン)
- 1987年 2月4日 春期ポート合宿 Part 1
- ～9日 (於；熊本県 球磨川)
- 3月14日 春期ポート合宿 Part 2
- ～19日 (於；岐阜県 長良川)
- 4月29日 吉野川ポート合宿
- ～5月 2日 (於；徳島県 吉野川)
- 5月24～29日 春期 外苑合宿

過去30年ではじめて 岷江へ

宮朝 喜安 対馬30年対馬年大西開

北の高嶺の水を砕き

岩を削って^{たぎ}滾り^お墜つ

太古の御姿そのまゝに

幾千年人の歴史を呑みこんで

今日から明日へ

明日から永遠に

不^と変^わの時間^{いのち}が流れます

そのあなたの一瞬を

どうかお与え下さい

どうかお返し下さい

あの涼やかな^め瞳の

あの人を —— 。

山野 迪

村上哲也君を悼む

関西大学経済学部教授 安喜博彦

遭難の第一報が入った日、私は秀麗寮の学生諸君との泊まりがけの話合いをしていた。この会合には学生部長も出席しておられ、中国からの連絡が時々刻々伝えられていたが、当初は自分がクラス担任をしている学生に関する報であるとは気づかなかった。

経済学部では、一年配当の科目に基礎経済学という科目があり、これの担当者が一、二年次の担任を兼ねることになっている。村上君は、数回行ったこの科目の試験では部の活動もあったためか、初めの二回は低空飛行であった。とはいえ、最後に強烈な踏ん張りをみせた学生である。また、このクラスには強度の難聴者の学生がおり、ノート・テイカーを依頼した際、率先して引き受けてくれた学生でもある。にもかかわらず、同君が探検部に属し、中国遠征中であることは全く知らなかったわけで、我ながら日常的な学生諸君との接触の乏しさを痛感する。

村上君が変わり果てた姿で本学に帰ってきた日、あいにく学生部長に所用があり、私が代わって彼を迎えたことにも因縁めいたものを覚える。それだけではない。これまた自分の不名を曝すことになるが、中国での搜索の労をとってくれた安川君とのご縁にもこの日まで気づいていなかった。同君とは彼の恩師である楠先生とともに、大山に登り一夜をともにしたことがある。

この度一文を記すに当たり、手元にある村上君に関する記録を整理して彼の書いた文章を読み直した。基礎経済学の時間に課した夏期休暇中に読んだ書物の感想文であるが、ほとんどの諸君が経済学に関係のある文献を選んでいる中で、同君は大岡昇平の『野火』をとりあげ、「飽食」と「飢え」の両極の世界におけるその極限下の人間の行動について問うている。村上君は「小説を読む度に、思うことであるけれど、僕が主人公の立場になったらどうするであろう」とも記しており、読書に人生の糧を求めていたことも伺えるが、この感想文では、それが極限状況で自分がどうするであろうかという思索になっていたようだ。それはまた、苦難を克服しうる堅固な意志力を自分のものにしたいということであったかもしれない。

村上君は人生半ばにして、あまりにも突然に逝ってしまった。しかし、彼の自らの悔のない一生を全うしたといえよう。今はそのことを念じるのみである。

過去30年ではじめて味わう悲嘆の慟念のへき土村

探検部OB会長

竹本靖秀

探検部OB会会長

探検部初代

村上哲也君が20歳というあまりにも若く、短い人生で逝った。

探検部現役・OB一同非常に残念に思っているが、それ以上に村上君自身も無念なことだったろう。心から哀悼の意を表します。

思えば6月26日の深夜、事故発生の連絡を受け、臨時事故対策本部となった(株)タンクに駆けつけると、すでに現役幹部をはじめOBが10数名集まっていた。現地中国からの国際電話のベルが鳴るたびに、全員が受話器前に集まり、経過報告に耳を傾ける。そして、壁にはられた岷江の地図を検討しながら現地へ指示を出す。

焦燥にかられた長い一夜が明け、翌朝から事故対策本部は、関西大学学生課内に移された。その対策本部には、部長の杉原教授、顧問の加藤教授、川手教授、木庭助教授が顔を見せ、連日、多数のOBが参集した。東京をはじめ地方にいるOB、毎年の総会にもほとんど出席しないOBの顔も見られ、またニューヨークやハワイ、シンガポール在住のOBからも安否を気遣う国際電話が寄せられた。

ボート発見、ライフジャケット発見、ブーツ発見と悲観的な報告が入るたびに対策本部の面々に憔悴感が漲る。そして、最後の最後まで生存を信じていたが、現地捜索隊の安川隊長から遺体発見の連絡を受け、その望みも絶たれた。

大学内で行われた帰還式では、大学関係者から下宿のおばさんまで、式場は立錐の余地がないほど多数の参列を見た。創部活動から携っている初代の私にとって、過去30年ではじめて味わう悲嘆の体験であった。

7月5日の告別式には、現役・OBなど満席のバスで金沢に向かった。帰途、車中では再びこのような事故を繰り返さないよう、村上君の冥福を祈りながら全員で痛飲した。

事故発生からこの事故報告書に至るまでその一連を見て、探検部の層の厚さ、幅の広さそして友情の深さを発見し、30年の歴史の重さを体得した。

村上君の死をむだにすることなく、これを機にますますの発展を望みたい。

村上君への感謝の言葉

岷江遠征隊隊長

岩根大典 探検部28代

君を流れの中で、最後に見てから随分たった。裏返ったゴムボートにつかまっている姿が、私が流されながら見た、君の最後の姿だ。本当なら今頃は、その話を肴に君と酒でも飲んでいる筈だった。

君がこの計画に参加を申し入れてくれたのは、本当に我々が困っていた時だった。3年に及ぶ交渉がようやく実を結び、岷江を下る許可がやっと得られそうな時だった。そして、そうであるにもかかわらず、長期にわたった交渉のためメンバーも一部卒業し、遠征に必要な人員の確保すら、出来ていない状態の時だった。そんな矛盾にイライラがつのっていた時に、君が参加してくれたのだ。本当に嬉しかった。君のおかげで実現したともいえよう。

しかし、メンバーが揃ってからでも、直前まで慌ただしい計画で、君も疲れたろう。中国に渡ってからは尚更であったろう。隊の中で最も若く、様々な面で神経を使い、苦しい時もあったと思う。汶川の地で中国の協力隊員の人達と飲みに出かけたりしていたのも、少しでもリラックスしたかったからと思う。そんな君の疲労を感じながら、叱咤していた私を恨んでいるだろうか。

考えてみれば、協力隊員達と一番親しかったのは、君かもしれない。事あるごとに色々な言葉を通訳の人に聞いていた君だった。チベットの子供達に、覚えてたの言葉を試していた姿や、町でヒマワリの種を買おうとしたが通じなくて、通訳を頼んでいた姿が思い出される。

朝晩の飯の仕度にも、苦勞していたようだった。米も調味料も我々の口には、ほとんど合わなかった。そんな中で粥をつくってくれた君の努力には感謝している。また、君がサポートの時に写してくれた写真は、実に素晴らしいものだった。瀬にもまれるボートがきれいに写っている素晴らしい写真だ。有難う。全く君の苦勞は数え上げればキリがない。

私は合宿中に幾度か君達に約束した。また、成田空港へ見送りに来られた、君の叔父上の川上氏にも約束した。「必ず皆、生きて連れて帰ってやる。」と。約束を守ってやる事が出来なかった。生きて連れて帰ってやる事が出来なかった。すまない。どんなに言葉を尽しても、意味がないことはわかっている。だが、私は君に謝るしかないんだ。あの激しい流れの中で、どれほど苦しかったろう。水中に引き込まれ上下もわからない中で流れ続け、どれほどつらかったろう。すまない。君が参加することによって実現したこの計画を、君の死を持って終わることになるとは、あまりに悲しい。まだ20歳だ。生きていれば、これからどれほど素晴らしいことをするか、可能性は限りなかった筈だ。その可能性を断ち切ってしまったのだ。何と言えれば良いのだ。

我々は君と共に追いかけた夢の事を忘れない。共に、何事かを成さんとした、その志をいつまでも忘れない。心から君の冥福を祈っている。

6月26日 雨

山下和彦 岷江遠征隊副隊長
探検部30代3回生

新入生が入ってきた。待望の女の子も入部してきた。その中にあって、勧誘もされていないのに自ら我が部の扉をたたいた男がいた。それが村上である。彼は、何かの雑誌の中で、関大探検部についての記事を読んで、大学に入ったらこれしかない、と思っていたそうだ。

私は、この話を聞いて、なかなか有望な1回生が入ってきたものと、感心していた。実際彼は、積極的に部の活動に参加していたし、先輩達からも、かわいがられていた。村上は、高校時代に、カラテをやっていたとかで、体格は良かったが、少々ふとっていた。しかし、それが何か村上らしさでもあった。

村上とは、その年の前半まで、あまり話しをする機会もなかった。というのも、私は川に専念していたし、彼は、その他のフィールドに顔を出していたからだ。それが、夏休み明けぐらいから、ボート合宿に参加して来た。

彼は、合宿中ほとんど食糧と会計をまかされていた。食糧と言えば、隊員の胃袋を満たす重要な役どころである。食事の良し悪しでその日一日の活動の疲れの癒え様もちがってくるし、次の日の活力にも影響を与える。村上は、その点合格であった。彼は、メシ炊きがなかなかうまかったし、おかずにもいろいろ工夫をこらしていた。

村上は、いつも合宿に文庫本を持ってきていた。彼は、歴史物が好きらしく、「太閤記」とか、「宮本武蔵」を愛読していた。体に似合わず彼は、ナイーブな所があった。反面、これと思ったならなかなか考えを変えない頑固な面も彼にはあった。

外苑合宿の時、村上は班長であった。私はCLとしてこの合宿中終始どなりちらしていたが、村上は良く下級生をまとめて、しっかりしていた。村上は、1回生の時の経験から、どうしたらどなられずにすむか知っていたので結構要領よくやっていた。

また、彼は、1回生の面倒みがよく、合宿の前・後にかかわらず、下宿に呼んでは、酒を飲み合い、夜遅くまで、語りあかしていたようだ。1回生の連中も、「村上さん、村上さん」と、兄貴のように慕っていた。

私は、村上と酒を飲む機会は少なかったが、よく球撞きに行った。あのころの流行で、村上などは、下宿の先輩と夜中の2時頃まで、球撞きをやっていた。私はまだ覚えて、村上の足下にも、及ばなかった。中国へ行った時にも、暇な時間に街に出て、球撞きをして楽しんだ。私も今ではそこそこ撞ける様になった。もう一度村上と時の経つのを忘れて球撞きをやりたかった。

何かの縁で、同じ部に入り、同じ夢に向かって情熱を燃やした同志として、彼のことは私の胸にいつまでも刻まれるだろう。

少し影のあるあの笑顔を、私の目の奥に残した村上よ、安らかに眠れ。

1987年9月27日

クロスカントリーの思い出

岷江遠征隊員

大西 伸 紀 探検部30代3回生

昨年度('86)の入学式間もない日、我々探検部員は新人勧誘の為、ガイドンスを行っていた。午後になって暫らく客足が途絶え、我々は退屈そうにしていたのだが、そんな時1人の青年が歩み寄り、笑顔で机の前の椅子に坐ったのである。その青年はジーンズスタイルが良く似合い、油っ気の無い黒髪が風に靡いていた。

彼はウチの探検部を知人から聞いて既に知っており、『入るのなら探検部』と決めていたという。私は感激しこの村上と名乗る新人の入部を喜んだ。

その後彼と一緒に飲みに行く機会が何度かあったが、実に気さくな性格で、態度も常に堂々として一種の貫録の様なものがあり、新人だから、という甘えや、先輩に気遅れする様子は全く感じられなかった。彼がいつか他の部員と口論して「お前ほんまに新人か!」と言われた際、「態度だけは三回生ですから」と冗談交りに答えたのが、それを物語っている。

各種の合宿にも彼は積極的に参加していた。私の彼に関する思い出は数多い。ボート合宿等でも彼にまつわる話は尽きないが、部の恒例行事として秋に行われるクロスカントリー(2人1組で数カ所のチェックポイントを回り、最終順位を競う)もその一つであり、昨年度村上と組む事になったのがこの私であった。

第一チェック・ポイント(以下C・P)に早く到達する為、山道をショート・カットしようとしたが失敗、アスファルト道路に戻った頃には陽も完璧に暮れており、もはや最下位必至かと思われた。が、途中のC・Pの駅で何組かの棄権組を後にして、我々は尚も寝ることなしに歩き続けた。

しかし途中私のミスで道を何カ所か間違えたりした為、必要以上の歩行で村上を疲れさせ、最後のC・P近くで私に遅れをとり始めた。歩こうとせかす私に村上は、「大西さん、これから20分間ここを通る車にヒッチの合図して、もしOKだったらヒッチしましょうよ。」と提案。私は村上の足を考慮し、それに同意する事にした。しかし世間は冷たく、どの車も村上のサインを無視して通り過ぎる。

あと1分。「もう来んやろ。」と言って歩こうとした矢先、1台の車が遠方から現れて来た。すかさず手を振る村上。その車は我々の前で止まり、運転手は窓から顔を出し笑って言った。「はい何でしょうか。」それはサポートのOB、寺西氏であった。村上と私はヤバイと思い、「いや、僕は少しの間ここで休憩してたんですよ。」等と胡麻化しその場を取り繕ったのだが、誠に冷や汗ものであった。

結局、そのまま歩き続け、ゴールの山小屋に着いたのは昼の1時、参加8組、完走4組中の4位であり、一応入賞はしたのである。

終了後、「来年また村上と組むことになったらもっと判り易い道を選ぶ様にしたるワ。」「いや、大西さんと組んだら疲れるからもういいですよ。」等と言っていたのだが、その村上の声が今も私の耳に残っている。

深 遠

岷江遠征隊隊員

加藤 隆文 探検部30代3回生

中国から帰国して1週間ほど経っていただろうか。もっと経っていたような気もする。前期の試験が終われば夏休みということで、大学はざわめきを始めていた。探検部だけは、その中で取り残されたように、別の時間を刻んでいた。部員たちは、“村上の死”に戸惑い続けているように思えた。

部員たちが並んだ後のほうに村上が立っていた。「あれ、村上、どうしたんだ」と驚いた僕に、神妙な顔つきをしながら口もとに照れを見せた村上特有の表情をしながら「まあ、いいですやん」と言った。僕は「そうか、日本に帰ってきたんだな」と聞いた。村上は、微笑んだように思う。僕は、そうかとうなづいた。それから先はよく覚えていない。朝、目が醒め、僕は夢の中に村上が出てきてくれたことを思い出し、嬉しくなった。そして村上の魂が日本に帰ってきたような気がした。心に深く沈んだ、村上に対する漠然とした意識の集積された十字架の重さが少し減り、明るさを少し帯びた。

1年生の新人部員勧誘の時間。まっ先に入部を決めたのは、村上だった。がっちりした体格、ものをはっきり言う姿に、僕は太に期待をした。初めて一緒に合宿をしたのは、それからすぐの五月合宿（前穂・西穂）だった。互いに雪山は初めてということで、期待と不安で参加した。頂上近くまで登っていたが、村上と僕は疲れと怖さで、へばり気味だ。「休みましょう、休みましょうよ」と言う村上の言葉でピッチを切ることになった。素直に思ったことを言う村上を羨ましく、また気持ちよく思った。雪上訓練では、「ウオー、ワー」と歓声を上げ、はしゃぎながら、雪で真っ白になっていた。この合宿で山への興味が大きく膨らんだのだろう。中国の川下りが成功したら、山をフィールドとした活動をやりたいみたいなのを聞いたことがある。買ったけど一度もはくことがなかった登山靴。下宿の下駄箱の上に、ほこりがかぶって置いてあった。

「加藤さん、加藤さん」と村上の叫ぶ声が聞こえる。転覆で流された僕は、川岸で灰色の雲の間から見える薄い青い空を、夢を見るように見ていた。しだいに声が近づいてくる。ふと目をやると、村上の顔が真上にあった。「だいじょうぶですか」と聞く村上。ろくな返事ができない僕を村上が背負い、車の方へ歩いた。「どっか痛いところありませんか、だいじょうぶですか」と心配げに聞く。僕は背中から伝わってくる村上の体温の暖かさにホッとした。今度は、僕が村上を助けなければならなかったのに。ボートが裏を向いて流れ、村上たちが流れていく。ただ、僕はその姿を追って必至で走った。川は、次から次へと高い波を生み、岩にぶつかり、波と波がぶつかりあう。雨が降り出す。行っても行っても、川の様相は静まるばかりか激しくなっていく。僕はもう半べそになっていた。結局、僕は村上を救うことも、見つけてやることもできなかった。ただ、動かない村上の茶毘に付される姿を見つめているだけだった。

今も部室や、一緒にやっていたバイト先に、神妙な顔つきをしながら口もとに照れを見せて村上がひょこっと来るような気がしてならない。あれ以来、夢の中に村上は出てこない。漠然とした十字架は、僕の心の深いところで少しずつ明確な形をつくり始めている。

DAS FÜR DEN KAMARAD MURAKAMI

——同志 村上に捧ぐ——

三 春 保 探検部29代主将

昭和62年6月26日午後11時20分より現在に至る迄、飽くなき闘いは終止符を打てずにおります。またそれは、連綿と代々受け継がれるものではないかと思えます。この事一重に、不帰の人となられた村上哲也隊員へのせめてもの償いであり、これから関西大学探検部で活動する「同志」達への教訓であるとする故に、とても申しましょうか。

この度の『岷江ゴムボート航行遠征計画』に於いて、その準備段階からの細やかな支援を怠り、唯為すがままに近い状態にした執行部代表。今遠征の「勇気ある撤退」を岷江隊に勧めることが出来ず、唯まんじりと大阪への無事帰還を待つ不慨ない主将。何れにせよ、あたら若い人命を死に至らしめた責任の一端は私にあり、親族の方々を始め計画関係者の皆様に何と申し開きすれば良いのか言葉が見つかりません。出来ます事と言えば、この事故報告書によって部としての謝罪と省察の意を表し、探検部々員一同の責務を少しなりでも果たすことではないかと考えます。

顧みますに、遠征隊出発の半年程以前より、部内に提出される計画に対する無関心さが頃に問題となっていました。企画委員会に於いての計画書の質疑応答は、各人納得する迄行われるが、いざ準備・開始という事になると自分達の合宿準備に忙殺されて、他を考える余裕を持っていない状態に陥る事が殆どと言えました。そのままの状況で、今遠征が開始されたのですから、遠征隊員の気付かない不備な点を補う助言が出来る筈がありません。企画委員会だけに限らず、例えば岷江流域の書物研究を手伝うとか、該当部門に精通している人物を紹介するとか、今となっては詮なき事ばかりですが、隊・部一体の意識向上に努めるべきでした。

また、部を掌握する立場として、不完全に近い国内合宿をままだに許諾していた体制、畢竟すれば、長期展望を以て1987年度の活動方針を明確に提示出来ずにいた執行部、その運営に悪弊がありました。3年前、『ヤルツェンボ全流航行計画』という途方もない構想から始まった計画が、このような形で終焉を迎えると誰が予測したでしょう。否、このような悔恨より捲土重来を村上隊員は望むと思います。

人は、窮迫した状態を永い間持続することなど中々出来るものではありません。しかし、探検部がある限り、「同志」達が集う限り、未来永劫この戒めは伝えられるべきものと思います。あの一人の尊命を気遣った1週間が、我々の頹唐した気概を鞭撻してくれた事に感謝しなければなりません。各々の心中にしっかり刻印し、体制の改善と活動の発展を期す事が、村上隊員に捧げる事の出来る最善の手向けではないでしょうか。

赤県神洲に安寧する心優しき魂へ

村上の思い出

海堀 健 探検部30代主将

村上がなくなってから、いつの間にか随分時間がたってしまいました。自分が薄情な人間だとは思いませんが、正直いって、村上の死を知った時も、その後もどう感じているのか自分自身の感情がはっきりつかめていませんでした。そして今になってようやく、それが私にとってどれほどの人物を失うことを意味したのか今になって痛感しているのです。

彼の人柄の多くの美点は、彼を知る者皆が例外なく認めるところです。入学式及び新入生ガイダンス期間中の部員獲得作戦。ここで村上と初めて出会ったわけですが、彼のはっきりした受け答えや、陽気で気安く、それでいて礼儀正しい態度は、この時接した多くの新入生の中でもぴか一で、しっかりした奴だと感心させられたのを、はっきりと憶えています。その上、関大探検部には前から興味を持っていました、ぜひ入部させて下さい、との返事には、入部決定者の出足の悪さにしばし憂鬱だった私の心も、一気に晴れたのでした。その後、入部当初よりあった中国遠征計画に共鳴し、探検部における活動の場をボートによる河川航行に求めた村上と私とは、すなわち探検活動という目標を果たす方法において異なる手段を選ぶこととなってしまったわけですが、唯一私が村上と共に過ごした球磨川でのボート合宿の楽しかったことを思うと、このことを大変残念に思います。春もまだまだ浅い2月、濃い朝霧の中での出発、凍えるような流れの中での力漕と昼前になってようやく顔を見せた太陽が、湿っぽい冬の日をうらかな春の日に一変させてしまったこと。そして、瀬に突入する寸前のスリルと一致団結した力で乗りきった時の感激に、ボートの醍醐味を垣間見た思いがしました。また川についての技術も知識もあるわけでなく、ただ単に一年早く入部したというだけの私に対しても、実に如才なく対応するなど、村上の先輩扱いのうまさに、ほんとに感心した合宿でもありました。すなわち陽気なくせに、いざという時には冷静沈着、責任感が強くその上、人当たりがよい。お世辞でなく、この村上がクラブにおいて大きな期待を担ったのは当然のことでしょう。そして現に1回生にも親しまれ、また岷江遠征隊の一員として、なくてはならぬメンバーとなってくれました。

大阪を発つ直前に空港で見送った村上は、少しばかり疲れているように見えました。が、なによりも嬉しそうでした。当然のことだろうと思います。村上が岷江遠征にかけた情熱には、まったく頭の下がる思いがします。彼は、中国との交渉に始まった遠征準備の中で、資金集め、援助の確保から、装備チェック・パッキングに至るまで実によく働き、割り当てられた職務以上のものを立派にこなしました。これら根気のいる準備段階はすべて完了し、あとは彼が遠征隊より一日早く大阪を発ち、東京でチケットを受け取ればよいだけなのです。ゲートで見送りの礼を述べ、ディバック一つ背負った村上は、元気いっぱい出発しました。大阪空港での見送りなどめずらしいことでもないのに、なぜこの日に限って機影の消えるまで見送る気になったのでしょうか。

村上はいつもGジャンを着ていたような気がします。そしていつも煙草をくわえており、ディバック一つ背負って、あの落ち着きはらった態度で学内の植え込みの間を歩いていました。そんな彼に天気の良い、暖かい日にはいまでもふと出会えそうな気がします。

奴との関係

北坂 敦 探検部31代2回生

今、改めて村上との関係を考えてみると、互いに同じクラブに籍を置き、様々なつらい合宿、トレーニングを一年間続け、2回生になった時点で残っていたのは、俺と村上の二人だけであった。大学の一般的な生活における友人とは違った寝起きを共にした（同じ釜の飯を食った）密度の濃い付き合い方をした友であった。だが酒を飲みかわす機会があっても、個人の考えや腹のうちを見せないといった孤高な面があり、もっぱら話す内容は、クラブへの不満とうまいトレーニングのさぼり方がほとんどであった。

印象に残っているのは、一緒に参加した（それが共に参加した最後のものとなった）外苑合宿であった。村上はトレ長で、一方俺はミスの目立つ装備係であり、2回生の立場にありながら体力不足の面などから班の1回生にかなり迷惑をかけたのに対し、彼は1回生をよく指導し見事なリーダーシップで新たな一面を見せられた。日常生活においても、下宿生の多い後輩に対し面倒見がよさそうであったし、食事時のおごり方にもきっぷのよさがよく出ていたと思う。1回生を家に呼び、話の輪の中心となっている彼を見ていると、良き兄貴分的な面を持っていたようだ。

こういう文を連ねたら美談ばかりのようであるが、クールでドライな性格の持ち主だっただけに、1回の時は仲々解けこめず、あけすけに物を言うため、内心傷ついたこともあった。1回の時お互いに良くわかりあえず、あまり良い印象を持っていなかっただけに、2回になり、協力し合うようになってからの期間があまりにも短すぎた。彼は俺より一才年下であるが、現実的な状況判断ができる大人の目を持っていたので、よき相談相手でかつ頼りがいのある奴であった。一言で言うなら親友と呼ぶにたる友達であった。

村上さんとの思い出

西村 潤一郎 探検部32代1回生

あの忌わしい事故の日から、はや四カ月過ぎました。最初に、事故が起こったことを知らされた時「村上さんが死ぬ訳がない。」と、事故を深刻に受け止めていませんでした。しかし、1日たち2日たって依然行方不明となると、少しずつ不安になりはじめました。そして「遺体で発見された。」という知らせが入ってもずっと「信じられない、信じたくない。」という心境でした。後日、他のメンバーのみなさんと一緒に変わり果てた姿で戻られた時に「本当に亡くなられたんだ。」という実感が湧いて来ました。

村上さんと初めて会ったのは四月十五日、この日は装備点検で、一緒にテントを張ったような記憶があります。そして大阪空港に見送りに行ったのが六月十日でしたから、結局村上さんと過ごした時間は、二カ月足らずという本当に短い間でした。

しかし、下宿が歩いて2、3分程と、とても近かったこともあり、メシを食べに連れて行ってもらったり、ビリヤードに連れて行ってもらったり、下宿にお邪魔しては、酒を飲んでくだらない話ばかり夜遅くまでしたり大変御世話になりました。御世話になったのは、私ばかりではありません。村上さんは下級生の面倒を本当によく見て下さいました。授業が終わってみんなでソフトボールをしたり、下宿に集まって天気図の練習をしたり、今思うと私達は、本当に楽しかったけれども夜遅くまでのバイトをしておられた村上さんを困らせていたのではないかと思います。今となっては、もう何もなす術がありません。ただ、静かに安らかに眠り下さいと伝えることができたと思います。

村上さんとの思い出

平井 哲示 探検部32代1回生

私と村上さんとの思い出を言われても、私がクラブに入ったのが特に遅く、村上さんが出発されるまでに、一カ月ぐらいしかなく、いっしょに行った合宿という外苑合宿だけであるので、どうしても日常生活や昼間のトレーニングなどのことがほとんどである。ふだん村上さんはおもしろくて気さくな人だなと思っていたが、トレーニングの時などにちょっとのろのろしていると、あまり怖い言い方ではないけれども、「はよせえ」とか「のろのろするな」とか言われてよく怒られたものだ。またトレーニング後で村上さんの3限目が無い場合、「おまえらメシ食うたか」と言われると、私たち1回生は待っていたように、「いえ、まだです」というと、「よし食いにいこ」と言われ、私たちは村上さんについていき、よく御馳走になりました。ふだん、私は自宅生なので村上さんに夜遊びにつれてってもらったりしたことないが、他の1回生はよく連れて行ってもらっていることが多かったようだ。

外苑合宿の時などは、班がちがったので夕方のトレーニングはいっしょではなかったのだが服部緑地までの長い長い歩荷の時の休憩の時などぼくが足を少しいたそうにしていると「大丈夫か」などと声をかけてくれるやさしい一面をみせてくれたこともある。村上さんの下宿に一度だけ行ったことがある。新歓の帰り村上さんの気分が悪くなった時、梅田からタクシーで帰り、関大前の駅付近で別れた時、ちゃんと村上さんが下宿に帰っているかどうか確かめるために行ってみると、私が行ったのにも気付かず、ベッドでグーグー寝ているのを見て安心したものだ。

もう村上さんは帰ってきませんが、御冥福をお祈りします。

3カ月の思い出

村山 善文 探検部32代1回生

岷江遠征出発の前日、村上さんは事情でたった一人の出発となった。自分はその日、他の部員数名と空港まで見送りに行った。実にささやかな見送りであった。ロビーでは冗談を言い合ったりしていたが、いざ出発となると村上さんは、少々緊張ぎみなのか、それとも、照れているのかさっさと飛行機の方へと歩いて行った。自分は、村上さん頑張ってきて下さい、と心の中で祈り、飛行機のあかりが夜空に小さくなっていくのをずっと見ていた。——今思えば、それが村上さんとの最後になってしまった。必ず見事に岷江を下って、意気揚々と帰国してくることをあたりまえのように信じていたのに。村上さんは遠い中国の地で帰らぬ人となってしまった。あともう少しのところ。とても口惜しくて、悲しい。このことを思うと、そんな感情がこみあげてきてたまらなくなる。4月に探検部に入部して6月までわずか3カ月しか村上さんと一緒にいれなかった。村上さんはいつも堂々としていて、まるで兄貴みたいであった。毎日のように村上さんの下宿をのぞいた。そして、たくさんのおもしろい話をしてくれたりした。外苑合宿のとき、自分は村上さんの班だった。とても大変だったろうし、迷惑かけてばかりだったが、とことん世話してもらった。あのときのとても真剣な我慢強い姿が最も強い印象として残っている。愉快でそれでいて頼もしい。それが村上さんだった。わずか3カ月の間に、数えきれない楽しい思い出や、共に頑張った思い出がぎっしりとつまっている。どんなに願っても村上さんは帰ってこないけれども、3カ月間の思い出と共に、村上さんが自分の中のどこかに生きつづけているような気がします。

村上さんとの思い出

時岡 佳弘 探検部32代1回生

入学と同時に探検部に入ろうと思いガイダンスに行ったときに、初めて話したのが村上さんであった。それが、村上さんとの出会いであった。

入部したてのころは、不思議なくらいに上級生との会話をする時には村上さんとばかりであった。5月の連休から始まって1年間の部の合宿の形態や内容、また昼のトレーニングや上級生の方々のエピソードなどを聞かせてもらった。それに昼はよくごちそうをしてくれた。昼になるたびに、「かかって来なさい。」と笑って言う。「本当にいいのかな。」と思いながらもすぐにおごってもらっていたものだった。村上さんによく世話をしてもらったと思うのは、私だけではなく1回生全員が思っていることだろう。

結局、私が村上さんとの合宿をしたのは、春期全体合宿である外苑合宿だけであった。この外苑合宿が近づいてくると、村上さんが「君たちは、まだ何も知らんのや。」と言って何か本当にこわがっていて、何も知らない私は、「歩荷なんて、ただ砂を持って歩くだけなんですよ。」

と笑って答えていたことや、同じ班だったもので、朝や晩の食事の用意をするときに村上さんが「早くしろ」と言っていたのを今でもはっきりと思い出せる。

村上さんとの別れが、あまりにも早すぎたために、まだ本当の村上さんを半分も見えていないだろう。もっといろいろな合宿でいい面やいやな面を見たりして、楽しんでいくかった。こんな別れ方になったことが残念でしかたない。

村上さんを想う

山田 勅之 探検部32代1回生

私が探検部に入って、村上さんを見た時の第一印象は、この人は三回生の人だなと思ったことだ。部室でどかっと座ってタバコをふかしている姿、太りぎみの体格、どことなく落ちついた雰囲気は、大人びてみえたからだ。

その後、5月に入って5月合宿が始まったが、村上さんたち岷江遠征隊は吉野川へ、私自身は西穂高へと行くことになった。そして5月合宿も終わり、外苑合宿がよいよ始まることになった。村上さんはトレ長であったが、常に歩荷でもトレーニングでも先頭でなければならぬという役をよくこなせるなあと感心した。それからこんなこともあった。コンパスワークで村上さんと組んだときのことだ。村上さんはコンパスの使い方をあまりよく知らず、お互いがどういうふうにするのだろうと言いあわなければならないハメにおちいった。他の組からだいぶおくてしまい疲れ果てている時に内緒で販売機のジュースをおごってもらった時は、なんて人情味の厚い人なんだろうと思った。

外苑も終わり、いよいよ岷江へ向けての出発の準備が始まった。村上さんとハウス食品へ食糧の調達にいっしょに行ったりもした。この時も昼ごはんをおごってもらった。余談になるが私が一番よくおごってもらった先輩は村上さんであった。岷江へ出発の前日に村上さんは先に成田へ向かったが、この時見送りに行けなかったことが、今思うと残念だ。岷江遠征隊も出発し、順調に航行しているという報告が遂次に入り安心していましたが、事故が発生し村上さんが行方不明になっていると聞いた時は、本当にびっくりした。と同時にこの時点では、まだたいしたことはないだろうとも思っていた。しかし、日がたつにつれて、いらいらがつのり、最後の中国からの電話連絡で村上さんの死を知らされた時は、信じられないという思いしかなかった。今でも村上さんが、ひょっこり現れるような気がしてならない。

村上さんの死と僕

大塚啓史 探検部32代1回生

探検部に入部して3カ月ほど過ぎたある日のことだった。ちょうど昼前、いつもの時間に部室のドアを開けると、清水さんが座っていた。あたりの雰囲気普段とはまるで違うのを感じ、なんとなく嫌な感じがする。事情は、ボートが転覆し行方不明者が出て、それが村上さんだったのだ。言いようのない不安と一緒に、妙な樂觀を皆で言いあった。いや、そう言う以外になかったのかも知れない。

「きっとどこかの遊牧民の家にでも行って、おいしいものでも食べてんじゃないか？村上さんのことだから……。」

日数が立つうちにそんな思いをかき消すように、ライフジャケットやブーツが発見された。

いやいやそんなはずはない。僕は思った。そして考えた。一日がこれほど長く感じられたのは、これがはじめてであった。

一時帰宅した夜のことで、電話が鳴り受話器を上げると、村上さんの死が確認された。

死ということ、心から泣いた。泣いても泣いても涙がとまらなかった。悲しさだけではなく、苦しさ、さみしさからも涙があふれ出た。暗い夜だった。一人の人の存在、村上さんと出会った3カ月、そういうことみんながもうそれだけで終わってしまった。外苑の時の村上さん、トレ長としての村上さん。それがみんな止まってしまった。

覚悟はできていたけれども、こんなにあっさりと人は死ぬものなんだろうか。

しかしこの事実はどうしようもできなかった。それだけに、今でも村上さんが居るような感じがさえするし、いないということを考えると妙な感じがしてくる。

村上さんが亡くなって、数カ月たった今、あの時の感情がうすれて行くようでこわい。これがなくなった時にはまた同じことが起きそうだし、村上さんまでも消えて行きそうだからだ。悲しくてつらい思い出だが、ずっと心の中にしまっておきたい。

大阪空港

岡田充弘 探検部32代1回生

初夏に起こったあの事故から4カ月が経ようとし、今はもう秋となり、雨も冷たい雨になりました。

最初に部室で事故の知らせを聞いた時は、ちょっとした事故で、日本でもボートから落ちたというような話を聞かされていましたからまたやっちゃったのかというような気持ちであったのを覚えています。それから最期の報告を聞かされるまでの数日間、暗い気持ちにはなってもあきらめの気持はありませんでした。しかし、村上さんは生きては確認されませんでした。日本

菊姫大吟醸

清水達之 探検部26代OB

86年4月、ボクはすでに大学6年生、その大先輩に向かって、入部したの1回生が、「清水さんですか。ボク、金沢出身なんです。ワハハハ……」と、いきなり笑いやがった。5つも年齢の差があるのに、どこか落ち着いていて、まだ、高校生ばい新入生が多い中、大学生同士の付き合いが出来そうな雰囲気をもっていて、いきなり笑われてしまったにもかかわらず、すぐ仲良くなってしまった村上。クラブの上級生にもよく可愛がられていたな。

村上が入学してきたその4月の下旬に、ボクはクラブを休んで、パプアニューギニアに行つて、一緒に合宿に行ったりすることはなかったけど、そのニューギニアに届いた手紙の中に「パプアに連れて行ってください。」と書かれていて、それが本心かどうかは判らないが村上となら一緒にニューギニアに行ってもいいなあと思っていたのに11月に日本に帰ると岷江遠征隊のメンバーに入っていて、結局、一緒に合宿に行くこともなく、ニューギニアの話は、永遠に保留になってしまいそうや。飲みに行つては、大騒ぎして、いろんな話をして今度は金沢で一緒に飲もうなって言つてたのになぁ。

クラブの後輩って、ただ同じクラブと一緒にいてる下級生っていうだけでなく、弟のような、そんな想いがつのるばかりや。大勢いてる後輩。でも、やっぱり一人欠けるって寂しいよな。

そう言えば、一緒に飲もうって言っていた菊姫大吟醸どうなってんやろうな。一緒に飲みたかったな、菊姫大吟醸。

大いなる^{ながれ}岷江に消える友垣の 墓石に一箱キャスターを置く

1987年9月23日 光徳寺墓前にて

別離の言葉

永井宏幸 探検部28代OB

アスファルトの路面が、しっとりと降りだしたにわか雨のもとで、静かに、そして黒く濡れてゆく。やがては街灯の光を白くはねかえすようになった。

雨に晒されても、ひとり祈った膝の間に顔を埋める者。それこそ顔をくしゃくしゃにして鳴咽する者。

雨も涙にたとえるならば、あまりに多くの涙を溢れていた。

僕はただ、人が死ぬって呆気ないものなんだな、とそんなシーンを眺めるばかりだった。悲しみというものは湧いてこず、なんとなく君という存在だけが想い浮んだ。

君が入部した時、僕はすでに4回生。でも初めからすぐに君は打ち解けてくれた。ごくまれに昼めしをごちそうすると、大丈夫ですか？なんてこちらの懐具合を心配してくれたりして。

皆で酒を飲みに行ったあと、大騒ぎしながら、多勢で君の下宿に押しかけた。僕は酔いつぶれてしまって、そのまま眠りこんでしまった。おまけに二日酔いでダウンしてしまい、翌日の晩まで居座ってしまって。それでも君は、腹へったでしょ、とカップラーメンに湯を注いでくれた。それはいなかのおばあさんが、君のためにと送ってくれたものだったのに。

昨年秋、二人で山へ行こうと、高価な登山靴を買わせてしまった。ところが、出発当日買出しですませていたのに、突然僕の都合で山行をやめにしてしまった。君はがっかりしながらも、けっして愚痴はこぼさなかった。にもかかわらず、とうとうあの靴で山を歩かせてあげられず、本当に申しわけない。

先輩でありながら、とても世話をかけてしまった。だから、君にはさよならの次に感謝の言葉を送りたい。

ありがとう。

私の見た、“村上”

庄山 あかね 探検部28代OB

あれは、「岷江」が他の隊によって先に下られるかもしれない時、「それでも行くのか？」と遠征隊のメンバーはミーティングを行っていた。昼休みの部室で、私は他の事をしながら、ぼんやりと話のやり取りに耳を傾けていた。その時、村上は「行きましようや、先に下られていてもいいじゃないですか。中国の川を下り切って、みんなでやったあと喜べ合えたらそれでいいじゃないですか。」確かそのような事を言っていたように思う。その時の光景が妙に印象に残っており、ああ、こいつホンマに探検部とその仲間が好きなヤツやなあと思った。

入部した頃の村上の印象は、ずんぐりした気のいいヤツという感じで、話してみるとなかなかおもしろい。もともと探検的な事が好きらしく、すぐに探検部の雰囲気になじんで、日々の大部分をBOXで暮らす仲間となった。

「五月合宿は山へ行きたいんですが……。」「ウン、じゃあ一緒に行こう！」と一度だけ村上と一緒に穂高へ登った。まだ入部間もない頃だったから、かなりしんどかったはずだが、「エーまだあ？」という顔をしながらもなかなかのがんばり屋であった。

1年の外苑では、歩荷で腰が痛くなるし、かくし芸の「バット折り」では足を腫らしてウンウンなるし、まだまだつたない村上であった。しかし、2年の外苑になれば、1年生の先頭に立って活躍する、いい兄貴分に成長していた。

「エーッ。ウソや。村上が行方不明？」夜、電話が入る。信じられない。「村上のことやから、また、どこかでボーッとしてるんとちゃうか？」実際に、村上がお骨になって帰って来ても、なかなか実感が湧かない。

村上と一緒に飲んだことはあっても、あまり真剣に話し合ったことは残念ながらない。私は村上の探検部で見せる姿しか知らない。しかし言える。「あんなええヤツ、なかなかおりませんで。」と。

教 訓

浅井 武 司 探検部28代OB

『期待』と言えば、「あなたに期待している人は？」と聞かれたら、私はやはり、身近な両親、家族を思い浮かべるだろう。この人々は必ず自分の味方であり、愛情をかけてくれる人々です。しかし、私はその愛情をあたり前のことと思い、最近、甘え過ぎているような気がする。誰かに必ず愛されているということは人間として生きていく上に一番大きな支えとなることだと思う。しかし家族の愛情というものは産まれた時から自分を包み、決して離れたことがないだけに、その大切さをつい忘れがちになってしまう。私の場合も今まで家族の愛情に対して、余りにも傲慢過ぎたような気がする。よく合宿に行く前に、おやじが、「武司、これからどの山へ登りに行くんや」、「大丈夫か?」「やめといたら良いのとちがうか」など言います。おやじが私のことを心配してその合宿についていろんな事を知りたがっているのがよくわかるのに、私は投げやりな返事しかしません。おやじはそれで諦めてしまい最後に「気をつけて行ってこいよ」と言います。その後でいつも後悔します。家族のアドバイスが役に立つことだってあるかもしれないのに、どうしてもっと、きちんと答えてあげなかったかと。何か私の身に起きた時、ある時は、夜も寝ずに私の身を案じ、またある時は、嘆き悲しむのはやはり家族の人々が一番なのだから。これからは相手の愛情に甘え過ぎて後に深い哀しみを残さないよう生きて行きたい。

最期に、村上！おまえは、我々が探検活動を行っていく上で、常に心がけていなければならないものを、我々に教えてくれたような気がする。おまえが残していつてくれたものは決して無駄にはしないし、できない。この部室に、おまえの面影は我々の頭からいつまでも消えないだろう。

村上を偲ぶ

鹿内 浩 探検部27代OB

「なぜ岷江なんですか？」四国吉野川の合宿で行った村上の言葉が今でも耳に残っている。私と村上とは、中国四川省岷江川下りの計画をした者とそれを実行する者という関係にありながら、今年になるまでただの一度も一緒に合宿に行ってやることも、ましてやボートの川下り技術を伝達してやることもできなかった。

村上の入学・入部と同時に私が東京の方へ就職するというギャップがあったにせよ、彼の目にはなんとも頼りなく無責任なOBに見えたことだろう。その彼との唯一の合宿が中国岷江川下り遠征を約1ヵ月後にひかえた5月連休の四国吉野川合宿の2日間である。

たったの2日間ではあったが私は村上の色々な面を見ることが出来たように思う。

遠征の1カ月前だというのに「遠征費用が全くたまっていません。」だとか「この遠征に参加したら今年の単位は絶望的です。」などと言っている姿にいかにも関大の探検部員らしい奴だという感じがした。

また川下りの途中、ボートが巨岩にひっかかり岩にとり残された村上がリーダーの岩根と共に川の水流でびくともしないボートをただがむしゃらに引き上げようとする姿に頼もしささえおぼえた。

しかし、この合宿で一番印象的だったのは結局ボートを引き上げられず、合宿を途中できり上げて帰路につく小歩危駅での待合室で村上をはじめ3回生の加藤・山下・大西らに「鹿内さん、なぜ岷江なんですか?」と問われた事だ。私は突然の予測もしなかったこの問いに思わず口ごもってしまった。

しかしながら、実際この岷江の計画は3年前、当初の目標であったヤルツェンボ川からロンブク川そして岷江へと中国側との交渉の過程で二転三転して決まっていた川であり私の気持ちの中にも岷江の魅力など深く考えるよりも、絶対この計画を実行してほしいという気持ちの方が勝っていたのが事実である。

遠征に向けての総仕上げのつもりで合宿に失敗し、技術面でもまた金銭面でも不安のあったときの発言とはいえ、彼らに迷いがあったのは確かだろう。村上は、本当に自分の意志で選んで岷江に行ったのだろうか。あるいは我々OBの無言の圧力から行ったのだろうか。

いずれにしても「なぜ岷江なんですか?」という問いに満足に答えてやれなかったことが今でも悔やまれる。

外苑の思い出

岡内修一 探検部28代OB

村上とは1年足らずの付き合いであった。

その頃私は4年生で研究室中心の生活をしていて、クラブの方は半ば引退ぎみであった。その様な中で村上との思い出といえば、春の外苑合宿の事が特に印象的である。とかく陰気な外苑合宿の中、彼は他の上級生よりまして陽気であった。ただ、歩荷の時は非常に苦しそうな顔をしていたが、それも私から見れば、まるで芝居をしているかの様であった。村上はいつでも陽気な性格である。

外苑合宿の最後の打ち上げの時である。彼は高校時代空手をやっていたらしく、1年生の芸を披露する折に見事な技を見せてくれた。それは向脛でバットを折るというものだが、結果はと言うと失敗に終わりバットはひびが入ったが折れなかった。

しかしこれがその時には非常にうけて、なかなか折れないバットを何度も気合いを入れて折

ろうとする仕草がなんとも言えず、滑稽であり、また痛々しかったのを憶えている。

その後、彼の足は半分内出血ぎみで腫れあがっていた様だ。しかしその時も決して痛そうな素振りは見せずに、ただ笑って痛さをごまかしていた。村上は負けず嫌いな所もあったのだろう。

岷江の彼方へ消えてしまった村上よ、君は私のできなかった夢をかなえてくれた男である。

村上へ

村瀬 環（友人）

「ねえちゃん、ねえちゃん」いつも面倒臭そうに、そう呼んでくれていたね、私のこと。お前が死んでしまったなんて、今でも信じられない。そのヌボッとした風貌、しゃべり方、今でも目に見える様だ。何だかんだ言っても結構優しくあったよね。恐らく、“ほんまに、しゃーないねえちゃんやな”そんな苦笑を心の中に浮かべていたんじゃないのかな。実際1回生のくせに急に大人びてるところがあった。みんなで『鶴一』に焼き肉を食べに行った帰りだったと思うけど、あの時は本当に迷惑かけたね。泥酔した私の面倒を最後まで見てくれて。家に電話かけてくれて。下宿まで引きずって行ってくれて。翌朝は、三春さんの所まで、荷物を取りに行くのに付いて来てくれたんだよね。何だかんだ言っても結局面倒見てくれる。そういうところあったよお前には。それでさ、その時あまりに汚ないお前の部屋を目撃してしまったものだから、1回掃除に行ったらかって言うと、「それでなくても疑いの目で見られとるのに止めてくれ。」なんてね。憎たらしいっていうか、かわいいうっていうか。暇つぶしに2人で茶店に入ったことが1回だけあったけど、その時だって、私から無理矢理レシートを引たくって、さっさと自分で払っちゃって私に払わせてくれないんだもんね。村上との小さな思い出を1つ1つ拾ってゆくと、私はその後にいちいちありがとうっていう言葉を付け加えないといけないみたい。お前の方でも私には割と気を許して物を言ってくれてたんじゃないかな。私が1人でそう思うだけかも知れないけど、そう思わせておいてね。五部の合同キャンプの時、普段あまり家族のことを話さないお前が、就寝時のテントの中で、ぼつりぼつりとしゃべってくれた身の上話。今でもはっきり覚えてるし、とてもうれしかった。『人生終わってみれば、いい事も悪い事も半分半分』いつだったかそんな事言ってたね。その言葉を思い出すと胸が痛くなる。これからの人生、いい事がいっぱい待ってたはずなのに。村上、お前のことは、一生忘れないと思う。